

# 隼人族の森を渡る風

創造の現場から 第24回

森の彫刻家

上床利秋

改組新第5回日展 第三科彫刻 会場風景



## 日本最大の彫刻の美術展

鹿児島県の美術に対する意識、そして展覧会に出品しようという意欲は昔から非常に高いと思う。県展彫刻部門には毎年およそ40点程度の新作が黎明館に並ぶ。県レベルにおけるその数は決して低いほうでなく、会場も変化に富んでいて面白い。

しかしながら、東京六本木の国立新美術館で開催された111回目の日展第三科彫刻部門には今年は248点の作品が陳列されている。規模としては鹿児島県の6倍強の圧倒的スケールであり、初めての来場者を驚かせている。彫刻は他の分野と違って作品を創り上げる工程に制約が多く、なかなか生涯を通して続けていくことが難しい。それにもかかわらず、全国に

読者にも知ってもらいたいと思いい、このエッセイを書いている。

今年はその日展で、応募作品を審査するという経験をさせていただいた。審査の方法は、19人の審査員がいいと思われる作品に手持ちの赤い札を一票として挙げることを繰り返す。

多ければ一番で入選決定、少なければ落選。まばらな場合は二番、三番と繰り返し、ボーダーラインを選別して決定していく。その仕事は作品を一瞬で決定しなければならず、その判断は経験とともに公正さがなければ務めることができない。



著者作「はやい、はやーい」部分 ブロンズ

私はいい作品の選別は、搬入作業の時からすべての作品を吟味しており、心の中ですでに決めている。作品は一瞬で見た時の感想と、時間をかけて観た時とは違う時もある。得てして、器用な作品は前者であるが、後者にこそ大成していく作家がいることも珍しくない。

私自身40年日展に出品し続けてきた。デッサンが正確で見せ場上手な作品を創れる人は、壁に直面すると諦めも早くてこの世界からいなくなる人もいる。逆に

は彫刻美術に対する情熱を持った人が少なからずいるということ



搬入時の作品撮影風景 於国立新美術館

器用でないと思われた人が、後年実に味わい深い作品を生み出していくこともある。それは作品創りを単なる出世の手段として貶めるか、または本当に好きであるかどうかの違いなのかもしれない。俗にいう大器晩成型の作家さんの芽を摘む節穴審査員にならないように自戒しながら、そして他人の意見を聴きながらも流されないように審査に臨ませてもらうつもりだ。

今年も無事に盛大にオープンを迎えることができた。ともに審査をした先生方とは仲良くなることが多い。信頼できる人たちと巡り会い、いい仕事になったと思えた。ほとんど身銭を出して審査の為に幾日も費やして、地方からはるる集まった彫刻バカが集団が、ともに飲み語る東京の夜はそこはかとなく嬉しい。

日展審査員 第一幼児教育短期大学教授